

芝居の魅力



住友生命保険会長

橋本雅博

はしもと まさひろ

会社人間として、どっぷり仕事漬けの日々を何十年も過ごしてきた身としては、「趣味は？」と聞かれることほど困ることはない。中には企業人として立派な功績を挙げてこられたうえに、自らの趣味についてもしっかりとした見識をお持ちの方もおられるが、とてもそんな域には達していないと思う。

ただ、若年の頃から唯一続いているのが「芝居を観ること」である（「演劇鑑賞」と言えるほどのものではない）。東京大学演劇研究会に在籍していた当時、後に日本の演劇界に新風を巻き起こすことになる野田秀樹氏率いる「夢の遊眠社」（「おもしろくてためになる夢の遊眠社」が創立時の正式名である）の立ち上げに縁あって創立メンバーとして参画して以来、イチ演劇ファンとして劇場に足を運び続けている。

「芝居の魅力は？」と問われると、月並みであり、また整理された考えでもないが、いくつか列挙することはできる。まずは、そのリアルさである。世の中でデジタル、サイバー、そしてDXなるものがまん延する中で、アナログ的なリアルさの魅力に敢えて惹かれるのかもしれない。次に、やり直しの利かない一発勝負の緊張感がある。

映画やテレビと違って撮り直しのできないところの危うさの魅力には抗しがたいものがある。

そして何といっても芝居は様々な芸術の総合ということである。脚本、演出、役者の演技に加えて、照明、舞台美術、音響というありとあらゆる芸術要素がアンサンブルとなって1つの舞台を創り出す。まさに様々なジャンルの演劇人達が総力を結集して創りあげたものという迫力を感じさせる。1つの舞台は多才な演劇人達が観客に対峙する真剣勝負の場とも言えるだろう。ちなみに私は興味深い公演があると、2回3回と観に行くことが多い。これは演劇を構成する要素が多すぎて、1回では全てを観きれないからだと勝手に自己解釈をしている。

長引くコロナ禍の中、演劇の世界は（もちろん他の芸術やエンターテインメントも同じだが）、かつてない苦境に直面している。公演中止まで至らなくても、公演回数の減少や観客数の制限等は、ただでさえ財政的基盤の脆弱な演劇界にとつて大きな打撃となっている。この拙稿が掲載される頃には、満を持して再登場した多くの演劇人達が、満員の観客達に真剣勝負を挑む場面が戻っていることを切に願っている。